

26/8/27

銀河鉄道の夜

書簡概要

- ・童話集 銀河鉄道の夜 (宮沢賢治 作、谷川徹三 編) 第101刷
- ・そういえば国語の授業が何かで「注文の多い料理店」を読んだ以外に宮沢賢治に触れたことないなあ、と。
- ・ZABADAKのモチーフとか、某有名ゲームとか、間接的に触れまくってるのに本家を読んだことないのはもったいない気がしたので読むことにした。

「北守将軍と三人兄弟の医者」

- ・ソーン将軍の放逐とそれにまつわる珍事だが本文の1つこういう割合を占めるように本筋と関係ない單歌が多くなる。
- ・「宮沢賢治は生前成功しなかった」とはいったが、こうも妙な構成をしているのを実際に読んでしまうと、その原因がうすらと察せられる。

「オッペルと象」

- ・ある村人の視点から、アコギな人間オッペルと下働きにされた象の関係が語られる作品。
- ・地の文が琵琶法師的で、聞き手(=読者)にわかりやすく驚き所を教えているのは童話としてはいい機能なのかもしれない。
- ・内容自体はわかりやすく「自然に逆襲される愚か者」のフォーマットである。

「じんぐりと山猫」

- ・じんぐりたちの裁判に呼ばれた一郎少年のお話。ある意味童話らしい童話がようやく出てきたように思えた。
- ・一言一句同じ大騒ぎを繰り返す民衆と子供がとんちで静めるというのが、実にそれらしいと思った。

「蜘蛛となめくじと狸」

- ・る匹の「生徒」の去就。このあたりで宮沢賢治の著作の特徴に「セクションまるごと何度も反復する技法があるのかな」と気づく。
- ・大まくなる、というあいまいな指針をそれまで未読大解釈して暴走したことによって全員が敗者になっておわる、まさに童話のような作品。

。「ツエねずみ」

意地の悪いねずみがひたすら厄介して、小さいものの社会から爪弾きにされていくお話。そこで最後に出会って心を通わせかけたのが、同じく爪弾きにされていたねずみ取りだ。というのも皮肉で面白い。少くもツエも自分を省けたらあつた命が長続もしたのかもしれないが、一方早々にねずみ社会から追いやられたあたりですでに読んでいたのかも。

。「クねずみ」

高慢なねずみが没落する話。「イヤな奴をねずみに仮託して何やら書く」というコンセプトで上記「ツエねずみ」を連続して置かれているのだと思うが、現代の我々からすると意識が高いねずみの話を盗み聞かせるために必死でかんしゃくを抑えようとしているのがどこかみえまじい。

。「鳥箱先生とフウねずみ」

またねずみだ……

何かを勘違いした鳥の巣箱と反抗期のねずみの話。最後の最後に前2作と共通のキャラクターが出てきて話のつながりがわかるのだが、その時のセリフが突如我々の住む現実に向いていて、まよとする部分があった。

。「注文の多い料理店」

有名な一作。さすがに国語の授業が何かで読んだ。

インテリ2人がインテリすむで独自の都合良い解釈を続けた結果、あわやごちそうにされてしまう……というお話。

今読み直すと、紳士2人はどうにも極力にかがっているように見えるし、その書リには警戒心が薄すぎるので、作者はそういう無軌道な貴族でも風刺したかったのかな？と思った。